

研究旅行要旨

ヨーロッパから見る、西欧文化と日本の最初期の頃の出会い —イタリア側資料にみる天正遣欧少年使節と二十六聖人殉教の事件を中心に—

18AR041 山外智公

これまで私たちは、日本で起こった西欧との関わりの事件について、当然のことながら日本人の視点で考察してきた。しかし、西欧と日本が初めて邂逅した時代、日本人が自分たちとは全く異なるヨーロッパ人の姿や言語、そして文化に驚き興味を持ったのと同様に、西欧の人々もまた、日本人や日本文化について何かしらの思いを抱いていたのは想像に難くない。

本研究旅行は、西欧、特にイタリアに残る、日本と西欧が初めて出会った頃の事件についての文献資料・美術資料を調査し、当時の西欧の人々が「日本」についてどのような考えを持っていたのか、西欧視点を踏まえて見直していくことを目的とした。今回は、日本でも西欧との関わりの中で、大きな事件として取り扱われる「天正遣欧少年使節団のヨーロッパ訪問」と、「長崎の二十六聖人殉教事件」の二つを中心に調査を行った。現地で得たそれらの情報をもとに、テーマとしたヨーロッパ視点から見た「日本」の姿を浮かび上がらせていく。

ヨーロッパから見る、西欧文化と日本の最初期の出会い
—イタリア側資料にみる天正遣欧少年使節と二十六聖人殉教事件を中心に—



—研究調査地—

イタリア(ローマ、ヴィチェンツァ、パドヴァ)、ヴァチカン市国

—研究目的—

西欧社会・文化と日本人の最初期の出会いについて考えるとき、1582～1590年の8年の歳月をかけたイタリアへの「天正遣欧少年使節」の旅を抜きには語れない。まだ10代の若さであった4人の少年たちが、遠く離れたイタリアの地で目にした「西洋」への驚きは、現代の我々には想像を絶するものであったに違いない。彼らは、九州のキリシタン大名たち(大友宗麟・大村純忠・有馬晴信)の名代として、イタリア人のイエズス会巡察師¹ヴァリニャーノの導きで九州から旅立った。この壮大な旅の出来事は、西欧の人々にとってもまた、極東の地からやってきた若き日本人の姿を強く印象付ける衝撃的な事件であったに違いない。記録によれば、少年使節たちは、ローマ法王を前に流暢なラテン語やイタリア語で挨拶し、堂々と雄弁に演説したために、人々はその聡明で礼節を重んじる少年たちの姿に、彼らを遣わした日本という遠い国の文化レベルの高さに驚いたという。

しかし、16世紀末の西欧人の瞳に映った「日本」や「日本人」の存在を考えると、我々は、使節団の帰国から僅か7年後の1597年、長崎で起こったキリスト教徒の処刑、「二十六聖人殉教」の出来事もまた忘れてはならない。なぜなら、この長崎での悲惨な殉教の出来事は、イエズス会士らの書簡によって即座にローマに伝えられ、その詳細な報告書をもとにした「殉教画」までが複数描かれたからだ。少年使節たちを、キリスト教化された「文明国日本」のシンボルとして驚きをもって迎えた西欧人たちが、その記憶もまだ冷めやらぬ頃、今度は、日本で行われた残酷なキリスト教弾圧と処刑という蛮行に再び驚かされたことだろう。

これまで、これら2つの出来事に関連したテーマで、すでに本研究旅行奨励制度を利用して調査・研究された先輩方がおられるが、それらは、それぞれの出来事を単独で扱ったもので、さらに日本国内に限定された調査であり、イタリアでの現地調査にもとづく資料収集と研究は一度も行われていない。そこで今回、筆者は、この2つの出来事を、16世紀末の西欧社会に日本のイメージを強烈に印象づけた重要な歴史的出来事として同時に捉え、イタリア側の資料に集中した研究調査を行った。調査手段としては、イタリアに点在する天正遣欧少年使節団、および二十六聖人殉教に関連した様々な資料の収集を行った。例えば、先行研究として重要な若桑みどり氏の著書『クアトロ・ラガッツィ 天正少年使節と世界帝国』(集英社、2008年)は、重要なイタリア側の絵画資料として、少年使節団が、時のローマ法王シスト5世の戴冠式の行幸に参列している姿を描いた壁画の存在を指摘している。また、ローマ郊外の港町チヴィタヴェッキアには長崎の二十六聖人に捧げられた日本聖殉教者教会が存在しており、内部のフレスコ画には二十六聖人殉教の様子が描かれている。これらの資料も現地で直接観察調査を行った。このような資料は、当時のイタリア人が、それらの出来事の何に興味を抱き、何を強調して捉えていたかという、西欧側の視点を明らかにする可能性をもっている。この2つの歴史的出来事に関連した資料を収集・観察・分析することで、西欧と日本との最初期の出会いを、これまでのような日本側からのみの視点でなく、西洋側の視点も交えて捉えなおすこと、これが本研究旅行の目的である。

¹ イエズス会の管区の布教がどのようになっているのかを定期的に視察する役割

—期待される成果—

これまでは、少年遣欧使節や二十六聖人殉教に関する研究は、それぞれ個別に、日本側の資料にもとづいた研究が主であったが、今回、新たにヨーロッパ側の視点を補足することで、16世紀末の日本が西欧社会にどのように捉えられ認識されていたかを明らかにすることができる。また、これによって、2つの歴史的出来事に関するイタリアと日本の認識の差異も明らかになることが期待される。また、この研究旅行を通して、来年4年次に取り組む同テーマの卒業論文のために、貴重な現地資料やデータを収集し、日本側資料とイタリア側資料にもとづいた多角的視点からの論理構成や分析考察を行うことができる。

—研究旅行実施日程—

2016年	滞在地	行動・調査内容
2月3日	福岡→香港	移動
2月4日	香港→ローマ	移動 ヴァチカン博物館 →ヴァチカン博物館内、シスト五世の間の天正遣欧少年使節団の描かれた「ラテラノ教会行幸図」の調査
2月5日	ローマ	サンタ・マリア・デル・オルト教会 →天正遣欧少年使節の一人中浦ジュリアンの肖像画の調査
2月6日	ローマ (チヴィタヴェッキア)	日本聖殉教者教会の調査 →日本26聖人殉教の様子を描かれたフレスコ画の調査
2月7日	ローマ	在ヴァチカン日本国大使館訪問 ローマ日本文化会館 →蔵書資料収集
2月8日	ローマ	ローマ・ジェズ教会 →日本26聖人殉教図の調査、また元和の大殉教図の調査 ローマ日本文化会館 →前日に引き続き、資料の収集・複写を行う
2月9日	ローマ	ヴァチカン図書館 →「ラテラノ教会行幸図の調査」
2月10日	ローマ→ ヴィチエンツァ	移動【鉄道】 オリンピコ劇場 →天正遣欧少年使節の使節歓迎の様子が描かれた壁画の調査
2月11日	ヴィチエンツァ →パドヴァ	移動
2月12日	パドヴァ	サンタントニオ・ダ・パドヴァ教会 →日本26聖人記念礼拝堂、祭壇画の調査

2月13日	パドヴァ →ミラノ	移動
2月14日	ミラノ→香港 →福岡	移動
2月15日	香港→福岡	帰国

○はじめに

本研究旅行の報告を行う前に、何故 400 年前の戦国時代に、年端もいかない 4 人の少年たちがヨーロッパへ渡ることとなったのか、整理しておく必要がある。1543 年、ポルトガル人が種子島に漂着した時の、いわゆる鉄砲伝来が日本とヨーロッパが初めて接触した瞬間であると言われている。それ以降、それまではヨーロッパでは、本当に実在するののかも分らなかった極東の国へ向けて、ある者は、ポルトガルやスペインの世界征服の波を背景にアジアとの貿易による一攫千金を夢見て、またある者は、新天地でのキリスト教布教の可能性に使命感をもって、続々と渡航を試みるようになった。

イエズス会巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノもまたそのひとりであった。固有の文化や価値観をもちながら、同時にキリスト教をはじめとする異文化をも理解しようと努力する勤勉な日本人の姿を目の当たりにした彼は、日本人は西洋の文化とキリスト教の教義の真髄に触れることで、将来、きっと、ヨーロッパに比肩するカトリック国になるのではないかと考えた。そこでヴァリニャーノは、日本人の 4 人の少年による遣欧使節団を組織し、ローマ法王のもとに派遣することを発案する。すなわち、彼が創立したキリスト教学校（セミナリオ）で学ぶ少年たちの中から、キリシタン大名の子弟や関係者で、伊藤マンショ、千々岩ミゲル、中浦ジュリアン、原マルティノという 4 人の聡明な 10 代の少年たちを選出し、日本から片道 2 年の歳月を要する命懸けの大航海に出発したのである。

この使節団の目的は、西洋人の視点からではない日本人の視点によるヨーロッパの姿を、これからの日本を担う少年たちの口から日本に伝えさせること、それにより、日本人の西洋文化への関心を大いに刺激し、ひいてはイエズス会の日本におけるキリスト教布教を容易に進めるための土台を築くことであった。また、逆に、ヨーロッパ側の人々には、教育を受けた礼儀正しい「文明人化された」日本人の姿を直接観せることで、未来のアジアのカトリック国・日本を目指すイエズス会の布教活動の偉大な成果を誇示しながら、彼らの布教活動への理解とさらなる援助支援を取り付けようという、当時の宣教師たちの宗教的・政治的目論見もあったという。大人たちの思惑は様々であったにせよ、使節に選ばれた幼い少年たちにとっては、それまで伝え聞くだけであったヨーロッパという遠い世界との出会いに、素直に胸躍らせていたに違いない。

今から 400 年余り前に実現した最初の日本からの使節団派遣という歴史的出来事について、現在のイタリアには、彼らが確かにそこを訪れた痕跡が、絵画や文字資料といった形で遺されている。それらの資料収集と調査は、少年使節団の 4 人が何をどのような眼差しで見たのか、また彼らが当時のヨーロッパの人々とどのような振る舞いで接したのか、さらには、初めての日本人を西欧社会がどのような目で観たのかというような、最初期の異文化交流の状況を解明するために興味深い手掛かりを得ることになる。

一方、帰国まで約 8 年を要したこの歴史的使節団は、結果的に悲劇的結末を迎えることになる。彼らが、ヨーロッパに向けて日本を発った後、豊臣秀吉の政策転換によりキリスト教が禁教とされたからである。これにより、使節団の帰国後、彼らは冷遇され、自らが見聞きし体験したことを人々に広める機会

を奪われ、やがて棄教や殉教の末路をたどった者もいた。さらに彼らの帰国の7年後には、この研究旅行のもう一つのテーマである「長崎二十六聖人の殉教事件」が起これ、ヴァリニャーノが夢見たカトリック国への望みは完全に絶たれてしまった。

このように、時代に翻弄された最初期の日本人キリスト教徒の少年使節団の歴史を掘り起こすためには、イタリアに残るこの出来事の貴重な資料を収集することが不可欠である。また、二十六聖人の殉教事件に関しては、使節団とは質的に大きく異なり、遠く離れた極東の地で起こった悲惨な出来事としてイタリアで詳細に伝えられており、当時、大きな衝撃をもって受け入れられたことが伺える。このような問題意識と研究目的のもとに実施した研究調査旅行について、以下に研究報告をまとめる。

○研究報告

I. 西欧が日本を知った日(天正遣欧少年使節団の来伊記録より)

1. ヴァチカン図書館—ラテラーノ教会行幸図(ヴァチカン市国)

まず、最初に、イタリアはローマにあるヴァチカン市国のヴァチカン図書館について報告したい。ヴァチカン図書館は、ヴァチカン教皇庁の中の施設の一部で世界最古の図書館のひとつである。この図書館の最奥部、「シスト五世の間」の壁画装飾の中に、教皇シスト五世²の戴冠式の際に行われたサン・ジョバンニ・イン・ラテラーノ大聖堂までの行幸式典³の様子が描かれたフレスコ画があることが事前調査で分かっていた。この壁画の中に、当時、偶然にも来伊していた天正遣欧少年使節団の4人が描き込まれているというのだ。



本来この図書館は、ヴァチカン博物館と繋がっており、写本展示室として利用されている「シスト五世の間」は、博物館の見学ルート終盤に組み込まれている。しかし、博物館職員の方の話によると、8年程前から一般への公開を中止しており、実際に、筆者も博物館から図書館へ入館することができなかった。しかし、このようなケースを予測し

1 「ラテラーノ教会行幸図」
Giuseppe Sorge “IL CRISTIANESIMO IN GIAPPONE E IL DE MISSIONE”
(Bologna:CLUEB,1988) p.73

² 在位 1585～1590 その最大の功績は、首都ローマの大規模な改造に取り組んだところにあり、現代に近い形に整備した最初の教皇と言われる。

³ 教皇はその即位儀礼としてサン・ピエトロ大聖堂から、それ以前のローマ司教座の中心であったサン・ジョバンニ・イン・ラテラーノ大聖堂まで行列を行うことが習わしである。

て、所属ゼミ担当の先生が用意して下さったイタリア語の紹介状を提示しながら博物館職員に粘り強く交渉したところ、ヴァチカン図書館への入室許可の申請を取り次いで頂けた。同時に、後述する在ヴァチカン日本大使館の方からも交渉して頂いたことにより、最終的に、研究目的という条件で「シスト五世の間」への入室許可を取得することができた。なお、その際に筆者が撮影した複数の写真に関しては、ヴァチカン図書館から本学 HP で公開される当報告書への掲載許可を得られなかったため、ここでは、文献資料からの写真を出典と共に掲載している。

実際に「ラテラノ教会行幸図」(図1)を観察してみると、その行列の中央列右側から奥にかけて金色の飾りを付けた白い馬に乗り、青い服に丸身を帯びた帽子という出で立ちで、明らかに他の人々とは異なった服装に身を包んだ4人の人物を確認できる(図2)。彼らにはスイス衛兵⁴たちが護衛についており、4人が乗る馬の馬具飾りからも、これらの人物が特別な存在で重要な来賓扱いにされていることが容易に理解できる。

天正遣欧少年使節の研究でも知られる美術史家、若桑みどり氏による『クアトロ・ラガッツィ 天正少年使節と世界帝国』(集英社、2008年)によれば、この4人こそが「天正遣欧少年使節」であるという。使節団は、行幸参加以外にも教皇シスト五世の即位式等の儀式と祝祭に主賓として招待され、通常は君主や諸侯が行う名誉な大役まで任せられたという。残念ながら、使節は「日本風」の服装で参列していないようで、一見して日本人であるとは分かりにくい。しかし、時の教皇シスト五世が自らの教皇戴冠式を、より印象的で劇的なものへと演出するために、アジアの果ての異国から教皇拝謁のために訪れた少年たちを招待したことは事実であり、その歴史的な行幸の様子を後世にまで誇示するために、このような形で「日本人」が描かれることになったものと考えられている。

使節団は、当時のヨーロッパで初めてみる日本人として大変興味を持たれた。また、過酷な旅をしてまで西欧文化とキリスト教の本拠地であるヨーロッパを訪れた4人の少年たちの姿に、人々は大いに感激し、彼らを盛大に歓迎した。少年たちは、現地ではどこでも大変な人気を博したのである。時を同じくして、偶然にも前教皇の急死に伴って急遽選出されたシスト五世は、この少年たちの人気を

利用したのだ。そして、後に同教皇最大の功績の一つと言われるヴァチカン図書館の整備と改築の際に、自らの晴れ舞台の姿であったシスト五世の「ラテラノ教会行幸図」をそこに描かせたのであった。



図2 描かれた4人の天正遣欧少年使節団
Giuseppe Sorge “IL CRISTIANESIMO IN
GIAPPONE E IL DE MISSIONE”
(Bologna:CLUEB,1988) p.73

⁴ 中世よりヴァチカンの警備や兵士の役割を担っている衛兵。青、赤、オレンジ、黄色の縞模様が入った制服が特徴。

2. サンタ・マリア・デル・オルト教会

次に、ローマ、トラス・テベレ地区にある16世紀に建てられたサンタ・マリア・デル・オルト教会（図3、4）について報告したい。この教会には天正遣欧少年使節団の一人、中浦ジュリアンの肖像画が飾られている。（図5）右奥の祭壇に飾られているこの肖像画は、日本在住の聖画家カトリック教徒の三牧樺子氏によって描かれたもので、ヨセフ高見三明長崎大司教より、この教会に贈呈された。従って、当時のジュリアンを描いたものではなく、ここからヨーロッパの人々の視点を明らかにすることはできない。しかし、この教会の Michele Caiafa 神父にお話を聞くことができ、なぜここにジュリアンの肖像画があるのか、その所以を確かめることができた。以下にその報告をまとめる。



図3 サンタ・マリア・デル・オルト教会（ローマ） 外観（撮影：筆者）



図4 サンタ・マリア・デル・オルト教会（ローマ） 内部（撮影：筆者）



図5 中浦ジュリアンの肖像画（撮影：筆者）

1568年頃、長崎郊外の中浦市で生まれたジュリアンは、天正遣欧少年使節団に副使として参加した。当時の彼の年齢は、わずか14歳であった。少年たちは、1585年、ローマに到着し、そこに約二か月間滞在した。6月初旬に他の使節員と共に遠足に出かけた際に、嵐に巻き込まれたが、このオルト教会の聖母に祈ったところ、奇跡的に助かったという。

中浦ジュリアンは日本へ帰国後、厳しいキリスト教迫害の中にあっても潜伏しながらキリスト教を信仰し続け、聖職者として信者たちを励まし続けた。そして、帰国して43年後の1633年、ついに捕らえられ、2日間にわたる過酷な拷問の末、他の外国人宣教師らとともに穴吊るしの刑で殉教した（図6）。ちなみに彼の死から375年後の2008年、中浦ジュリアンは、ヴァチカンが認定する聖人の一段階手前の福者に列せられた。生前の彼は、度々、「私こそはローマを見た中



図6 ジュリアン殉教の様子
Michael Cooper “The Japanese Mission to Europe, 1582-1590 (GLOBAL ORIENTAL, 2005) p. 108.

浦ジュリアンである」と演説していたという。少年の頃に見聞き体験した西欧キリスト教世界が、彼にどれほど影響を与えていたかが伝わってくる。その信仰心を裏付けるものの一つとして、オルト教会の聖母の取次の奇跡逸話があったのではないか。筆者は、そのように考えながら、ジュリアンの一生について、更により深く研究したいという思いに駆られた。現地での聞き取り調査に協力して下さった先のオルト教会の Michele 神父によれば、2008年のジュリアンの列福（福者になること）以降、ローマの彼らの教会でも、毎年10月第3日曜日にその記念日を祝っているとのことであった。今日、この教会を訪れる日本人も多くいるとのこと、ジュリアンが結んだ日本とイタリアの縁を感じることができた。

3. オリンピコ劇場—天正遣欧少年使節団の壁画

北イタリアにヴィチェンツァという町がある。数あるイタリアの諸都市を回る旅の途中で、天正遣欧少年使節団はこの町にも立ち寄った。そして彼らがこの都市を訪れた1585年、まさにその年に完成したのがこのオリンピコ劇場（図7）である。ルネサンス期の著名な建築家アンドレア・パッラーディオが中心となって建設に携わり、古代ローマの劇場を模したとされる。劇場内には数多くの彫刻が並び立ち、天井にはあたかも吹き抜けになっているかのように錯覚する立体的な空模様が描かれている（図8）。



図7 オリンピコ劇場 外観（撮影：筆者）



図8 オリンピコ劇場 内部（撮影：筆者）

この劇場の出口に位置する部屋の天井に近いところの壁にいくつかの壁画が並んで描かれている。これらのフレスコ画は劇場を記念するものとして描かれており、オリンピコ劇場内で上演されたソフォクレスの『オイディプス王』やG.Gトリッシノの『ソフォニスバ』の場面が主な題材として取り扱われている。その中で一つだけ異彩を放つフレスコ画がある。これこそが「天正遣欧少年使節団」の歓迎の様子が描かれたフレスコ画である（図9）。



図9 天正遣欧少年使節団歓迎のフレスコ画
Camera di Commercio "MILANO INCONTRA
IL GIAPPONE TESTIMONIANZE DELLA
PRIMA MISSIONE GIAPPONESE IN ITALIA"
(Milano,1990) p.92,93.

観客席手前右手に座る人物たちこそ天正遣欧少年使節団の面々であるとされているが、「ラテラノ教会行幸図」と同じように「日本風」の恰好はしていないので、一見すると分かりにくい。しかし、彼らがヴィチェンツァに立ち寄ったのは、ローマを訪れ旅の後半に差し掛かった時なので、ヨーロッパ文化への慣れや順応を考えれば当然かもしれない。残念ながらこのフレスコ画の作者は不明で、16世紀後期のヴィチェンツァの画家ということしかわかっていない。館内員の方の話によれば、当時話題となっていた天正遣欧少年使節団を招いて歓迎することが、開館間もないオリムピコ劇場にとっては好都合な話題性を提供し、開館の祝賀を盛り上げる意図があったのではないかとのことだった。この点も、教皇シスト五世による使節団の盛大な歓迎の目的と重なるかもしれない。この異国から来た少年たちが、16世紀後半のイタリア各地で、その大きな話題性のゆえに、様々な政治的・社会的目的で利用される存在となっていたことが容易に理解できよう。

4. 在ヴァチカン日本国大使館訪問

今回の研究旅行の際に、在ヴァチカン日本国大使館の方々には、前述したヴァチカン図書館への入館許可の取得をはじめ、色々お手伝いして頂いた。その際、館内2階に飾られていた「ラテラノ教会行幸図」の写真を見せて頂くことができた。日本国とヴァチカン市国の歴史的関係を示す資料として以前撮影され、大使館に保管されているとのことであった。ヴァチカン図書館で実物を観察する際は、天井付近に位置しているため双眼鏡等が必要になったが、この大使館に保存されていた至近距離からの写真のおかげで、細部の表現まで詳しく知ることができた。また、この壁画の写真が、在ヴァチカン日本大使館に飾られているということは、400年余り前にすでに日本とイタリアの間に使節団という関わりがあったことを、両国が大切にしている証であると感じた。

II 変わりゆく日本を見た西欧（長崎二十六聖人殉教事件より）

ここからは、天正遣欧少年使節団の後の時代、日本でキリスト教が禁教とされ迫害された時代の出来事について収集した資料の報告を行いたい。天正遣欧少年使節団の活躍により、ヴァリニャーノの目的のひとつであった「ヨーロッパの人々に、キリスト教の教えに熱心に取り組み、野蛮な存在であると思われる日本人の文化・教養力の高さを知らしめる」という点に関しては、十分に達成したように思われる。しかし、もうひとつの、「ヨーロッパ世界を日本人に見聞させ、日本人の口から西欧社会やキリスト教の素晴らしさについて広めさせる」という目的に関していえば、完全に失敗に終わったと言わざるを

えないだろう。なぜなら、使節団渡欧中の日本では、ポルトガル、スペインの世界征服の一端にイエズス会が関わっていると考えた豊臣秀吉によるキリスト教迫害が始まり、1587年には「伴天連追放令」が發布されたからである。これにより、国内の宣教師は追放され、教会は焼き払われた。ヴァリニャーノをはじめとする天正遣欧少年使節団に、日本とヨーロッパの関係の発展とキリスト教の布教の広がりを期待していた宣教師たちは、この現実をまったく予想していなかっただろう。また、ヨーロッパ本国に住む人々も、日本での禁教について知ったとき、あの聡明で信心深かった少年たちの故郷で一体何が起きているのか、と不安と疑問が絶えなかったに違いない。そして、禁教後もキリスト教を棄教しなかった者たちへの処罰、処刑が行われたと知ったとき、ヨーロッパ各地に衝撃が走ったことだろう。ここからは、そういった反キリスト教的な出来事に関して、当時のヨーロッパの人々がどのように捉えていたのか、この問題を中心に調査した内容を報告していく。

1. 日本聖殉教者教会

イタリア、ローマの中心地から電車で一時間の距離にある郊外の港町、チヴィタヴェッキアに日本聖殉教者教会(図10,11)は佇んでいる。この教会は1597年に長崎の西坂刑場で処刑された二十六人のキリスト教徒に捧げられた教会である。内部には日本人画家の長谷川路可氏が描いた二十六聖人殉教の様子 Fresco画と、日本風の服装に身を包んだ聖母の姿が描かれている。



図10 日本聖殉教者教会 外観(撮影：筆者)



図11 内陣の様子(撮影：筆者)

また、日本語で「日本聖殉教者」という文字が書かれており、日本の家紋のようなものも確認できる。当地を訪れて分かったことだが、この教会は、二十六聖人殉教当時に建てられたものではなく、また、改修工事前まではイタリア人画家の手による二十六聖人の姿も描かれていたというが、現在、それらの資料は何も残っていなかった。この教会の司祭の話によれば、毎年、日本人関係者も参加して殉教記念のミサや行事が行われており、また、イタリアでは珍しい長崎二十六聖人殉教の Fresco画や「和装の聖母」(図12)を見るために、常日頃からこの教会を訪れる人が絶えないという。この場所が、かつて日本で起こった残虐な歴史的出来事を記憶しながらも、今では、両国間の人々の交流を証するような重要な宗教的・精神的聖所として機能していることを実感した。以下、それについてさらに詳述する。



図 12 内陣左手前のフレスコ画
腕を引かれているのが聖ルドビゴ茨木



図 13 内陣左奥のフレスコ画
右側の聖職者が殴られようとしている

一番奥の後陣に描かれた5枚のフレスコ画を、向かって左側から見ていくことにしよう。最初の絵には、長槍をもった役人に右手首をつかまれて捕らえられた1人の少年の姿が描かれている。画面奥には、縛られた二十六聖人の面々の一部が刑場へ連行されていく様子が見える(図12)。この少年は、「信仰を捨てれば命を助けてやる。」と言われたが、それを拒否したという逸話がある。この少年は、聖ルドビゴ茨木である。確かにその表情からは、断固とした決意が見てとれる。また、



図 14 内陣中央のフレスコ画
中央:聖パプチスタ神父右:ルドビゴ茨木

場面左下で両手を合わせて祈りを捧げる男は、この絵を描いた画家の長谷川路可本人の自画像であるという。

次の作品は、十字架にかけられた二十六聖人の姿で、画面右下の神父服を着た男性は、役人に跪かされ今にも殴られようとしている(図13)。そこには、最後まで信仰を捨てずにひたすら祈りを捧げる聖職者の姿と、信仰を捨てない頑なな姿勢に苛立つ暴力的な役人の対照的な姿が描かれている。役人からすると、彼らの頑として折れない態度は謎めいた、薄気味悪いものとして映ったのかもしれない。

キリスト教徒にとって教えを守り殉教するということは、神に認められ、神の国へ近づくという行為であった。また、その行為は、他のキリスト教徒からの崇敬の対象となるほど美徳とされていたものであった。そのため本人たちの間では、死への恐れなどないと言口にするこもあつ

たそうだ。それを表すのが、次の作品だ。真中に位置するこの絵の中央に描かれている人物が、彼らの指導者格であった聖ペトロ・パプチスタ神父でその向かって右側に描かれているのが、この殉教者たちの中で最少年であった聖ルドビコ茨木である(図 14)。このパプチスタ神父をよく観察してみると、十字架にかけられても堂々と、これから殉教することを誇りに思っているかのような表情をしている。まっすぐ伸びた手足からも、死への恐れを感じさせない、まさに殉教者たちの指導者として毅然とした姿が描かれている。それとは対照に、右側に描かれた白い服をまとった少年ルドビコ茨城は、目の下の少し赤みがあった部分など、今にも泣き出しそうな表情をしている。しかし、彼も喜んでその身を神に捧げ殉教したとされ、わずか 12 歳の少年が信仰を守って殉教する、それがどれほどの決意を持って臨んだことなのか、そういったことを考えさせられる絵であった。その右手のフレスコ画は、2 枚目に紹介した絵と同じように十字架にかけられた殉教者たちの姿と、画面下部には、今まさに十字架に磔にされているひとりの聖職者の姿が描かれている(図 15)。後陣最後の絵には、捕まった信者たちに何かを話しかけている青い服の男性が画面中央に描かれている(図 16)。彼は大工のフランシスコであり、自分も仲間に入れて欲しいと訴え、一緒に連行されることになったという。そして、これらの壁画を全て見下ろすような天上の位置に描かれているのが、「和装の聖母」である。イタリアでは唯一の和装姿の聖母の腕に抱かれ、白い鳩を手にした幼子イエスが、右手を挙げて殉教者たちを祝福している(図 17)。

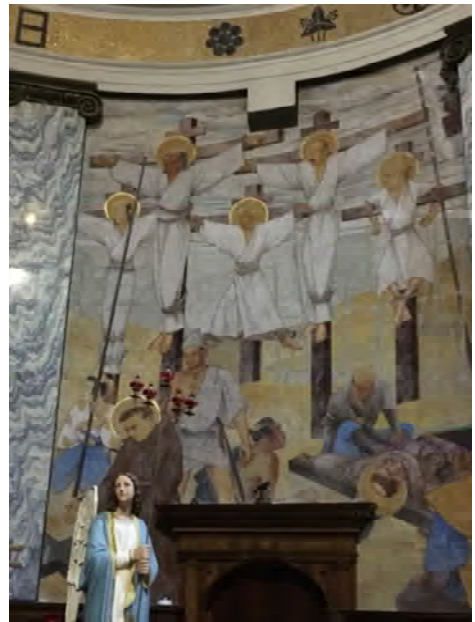


図 15 内陣中央のフレスコ画
中央:聖パプチスタ神父右:ルドビコ茨

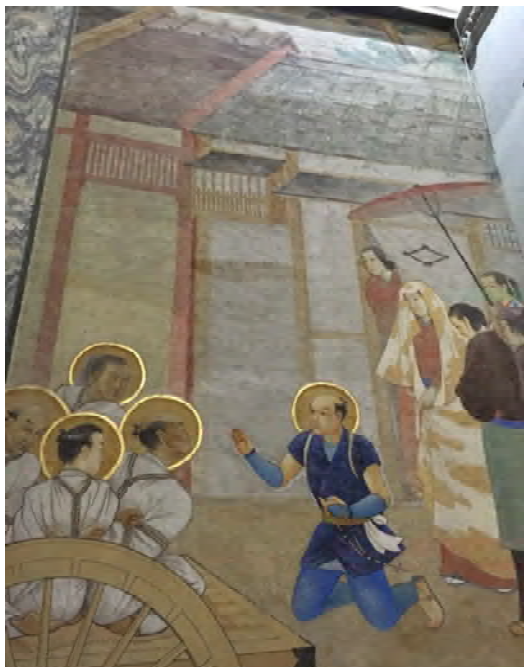


図 16 内陣右手前のフレスコ画
中央が大工のフランシスコ



図 17 「和装の聖母子像」天井画

※図 11~17 フレスコ画写真は、教会関係者に許可を得たうえで全て筆者が撮影。

聞き取り調査にご協力いただいた日本聖殉教者教会の司祭は、「この教会へは日本人もよく訪れる。また、イタリア人もこの殉教者たちに興味を持ちやって来る人が多い。殉教事件という歴史的な出来事は今でも衝撃的な事件であるし、当時のヨーロッパの人にとってもそうだった。記録に残し、この事件を両国が意識し続ける意味でもこの教会は重要な場所である。」とおっしゃっていた。長崎での二十六聖人殉教事件が、当時のヨーロッパに影響を与えたことは間違いない。それが、形となって今も残っていることはヨーロッパ視点から日本が意識され続けていたことを明らかにしている。

2. ローマ・ジェズ教会



図 19 元和の大殉教図 ① (撮影：筆者)

資料と考え、調査を進めた。

この大殉教は、二十六聖人の時代とは違い、江戸時代に徳川幕府が行ったものである。3枚ある殉教画の内の2枚は、個々の人物の表情に至る細部まで描かれており、実際にこの現場に居合わせた西洋人画家がスケッチしたものとされている。(図 19・20)「元和の大殉教」では、火刑に処された者、斬首された者と殉教の形は様々であったとされ図 20 の絵の中にはその様子がまざまざと描かれている。また、この絵の中では、個々の見物人たちが、日本人と西洋人の姿まではっきりと区別しながら描き分け

ローマ中心街に位置するジェズ教会は、かつてイエズス会の本拠地であった。出発前の事前調査で、この教会に長崎で起こった殉教事件の絵が複数存在することを知り、調査へ向かった。問題の絵は教会内部の一般には公開されていない聖具室(ミサを行うための祭具室)に通じる空間、司祭室のある通路の突き当りに飾られていた。事前調査で「長崎二十六聖人の殉教画」があると考えていたが、実際に飾られていたその絵は、その後の時代、1622年に長崎で起こった「元和の大殉教」のもののみであった。複数枚の殉教画が保管されており、その中に「元和の大殉教画」があることは分かっていたが、「長崎二十六聖人殉教」の資料を得ることはできなかった。しかし、二十六聖人と同じ西坂の処刑場で行われた、日本最大規模のキリスト教徒の処刑事件が非常に詳細に描かれており、二十六聖人殉教に劣らない重要な



図 20 元和の大殉教図 ② (撮影：筆者)

られていることから(図 21・22)、当時の様子を知るうえでの貴重な資料として考えられている。

3 枚目の殉教画は、見物人などを省いた殉教者の様子が中心に描かれており、そこでは、その処刑の様子までより詳細に描き分けられていた(図 23)。火刑や逆さ吊るし刑に処された信者たち、中には首のない者や頭に刀の刺さったまま神に祈りを捧げている者など、見るものが恐れを抱かずにはられないような、おぞましい殉教の様々な姿が克明に描かれていた(図 24・25)。



図 21 火刑に処される信者
元和の大殉教図 2 より (撮影：筆者)



図 22 斬首に処される信者
元和の大殉教図 2 より(撮影：筆者)



図 23 元和の大殉教図 3 (撮影：筆者)



図 24 頭部に刀を刺したまま祈りを捧げる信者
元和の大殉教図 3 より(撮影：筆者)



図 25 吊るされた信者
元和の大殉教図 3 より(撮影：筆者)

※図 19~25 殉教画写真は、教会関係者に許可を得たうえで全て筆者が撮影。

2. サンタントニオ・ダ・パドヴァ教会

このサンタントニオ・ダ・パドヴァ教会には、イタリア人画家の手による「長崎二十六聖人殉教画」の祭壇画があるはずであったが、同名の教会が調査に訪れたイタリアのパドヴァと同時にローマにも存在しており、問題の祭壇画はローマの教会にあることが現地で判明した。すでにローマでの調査を終えた後であったため、今回は訪問することができなかった。事前の調査不足によるもので、今回のひとつの反省点であった。

III. その他の調査の訪れた場所

ローマ日本文化会館

今回の研究旅行では、現地でしか収集できない文献資料の調査のために、ローマ日本文化会館附属図書館を訪問した。当図書館の館長が、筆者の所属ゼミ担当の先生と知り合いということもあり、「天正少年遣欧使節団」と「長崎二十六聖人殉教事件」に関するイタリア側の詳細な文献リスト作成にもご協力頂き、大変有意義な調査ができた。その中には、日本では集めることが難しいヨーロッパ視点から書かれた貴重な資料も含まれていた。是非とも、卒業論文に向けたこれからの研究に活用したい。

IV. まとめ

今回の研究旅行では、イタリアに残る「天正遣欧少年使節団」と「長崎の二十六聖人殉教」に関する資料から当時のヨーロッパの人々の視点を明らかにすることが目的であった。「天正遣欧少年使節団」については、調査内容から、彼らがただ日本からの使者として扱われていただけでなく、当時の日本にとって西欧文化・社会が未知のものであったのと同じように、西欧の人々もまた、極東から訪れた初めて見る日本人に並々ならぬ興味と関心を寄せていたことが分かった。また、それだけでなくその日本人という珍しい対象を利用して、政治的、経済的に自らの権威や知名度を上げるといった目的にもされていたことが明らかになった。これからは、使節団が訪れた他の都市にもこういった例や、資料がないか調査すると共に、使節団の少年たち一人ひとりの背景や生涯についてももう一度深く学んでいきたい。

「長崎の二十六聖人の殉教事件」については、目的としていた調査を達成できなかった部分があり、その原因として、事前の調査不足が目立った。フィールドワークを行う上で、計画段階での事前調査の重要性について痛感させられた。しかし、「元和の大殉教」の絵画資料など、思いがけない発見もあった。「長崎の二十六聖人殉教事件」と同様に、西欧の視点を知るための絵画資料として、今後の研究に活用していきたい。このような西洋人に日本を強く意識させた初期の「出会いの出来事」の痕跡が、他にも形として残っていることがわかり、その点は大変有意義な調査旅行となった。今回の研究調査旅行で得られたこれらの貴重な資料や調査データをもとに、これから卒業論文の執筆に向けてさらに研究を深めながら進めていきたい。

— 参考文献 —

若桑みどり『クアトロ・ラガッツィ 天正少年使節と世界帝国』集英社、2008年。

河合恭伸『異文化との遭遇 日本から見た異国 異国から見た日本』ルネッサンス・アイ、2016年、pp.18-19。

結城了悟『長崎への道』長崎印刷株式会社、1962年

松崎実『切支丹殉教記』春秋社、1925年

永富映次郎『日本二十六聖人殉教記』サンパウロ、1997年

佐久間正『南蛮人のみた日本』株式会社主婦の友社、1978年 pp.27-45,pp93-110

NHK取材班『その時歴史が動いた 32』KIT 中央出版、2005年、pp.114-159。

著者代表 海音寺潮五郎『日本史探求 第七集 海外編』角川書店、1973年、pp.151-168, 206-228。

レーモ・スキアーヴォ『オリンピコ劇場への誘い』アカデミア・オリンピカ、1980年。

Giuseppe Sorge ,*Il Cristianesimo in Giappone e il de missione*,Bologna,1988,p.73.

Michael Cooper ,*The Japanese Mission to Europe,1582-1590*

:*the journey of four samurai boys through Portugal,Spain and Italy*,Folkstone,U.K.,2005,p.108.

G.Rizzoni,G.Bogliari,M.G.saldelli(ed.),

Milano incontra il Giappone Testimonianze della prima missione giapponese in italia,Milano,1990,p.92,93.